

交流国と留学生の数は十四カ国・四十一人

# 善光寺海外留学僧派遣育英会の総会

留学僧二人が記念講演

善光寺海外留学僧派遣育英

会（黒田武志理事長）の第七

回総会が十月二十四日午後二

時から、黒田理事長の自坊で

ある横浜市港南区日野町一六

〇四の曹洞宗善光寺で開催さ

れ、留学僧や関係者らが出席

した。

総会に先だって、八月三十

日に遷化した鷲見透玄理事

（前大本山総持寺祖院監院）

の追悼法要が営まれ、また留

学僧二人による記念講演が行

なわれた。

釈迦殿での開会諷経は、本

尊上供に続いて鷲見理事の追

悼会が黒田理事長の導師で厳

修され、黒田理事長は「八十

の生涯石田を耕す。透玄の説

法老婆の禪。乾坤、祖院、遺

徳尊し。活し尽くす山雲海月

の篇」と香語を述べた。

この後、佐藤俊明常任理事

が挨拶し、「昭和五十九年に本

会を設立。翌六十年から留学

僧派遣を開始した。第一回留

学僧の帰国を待つて第一回総

会が開かれ、第七回となった」

と経過を報告。この間、留学

僧をインド、スリランカ、タ

イ、カンボジア、韓国、アメ

リカ、イギリス、フランス、

オランダの各国に派遣。また

中国、韓国、アメリカ、フランスから日本への留学僧を採用し、交流国と留学僧の数は十四カ国・四十一人にのぼると発表した。

佐藤常任理事は、この育英事業が「カ寺の事業としては破天荒の規模であり、高い評価を得ている」と話し、「留学僧の中には、カンボジアで虐殺された人々の慰霊行脚を続け、日本語教育に挺身している僧がいる。カンボジアと日本仏教との橋渡し役として大きな使命を担うだろう」と紹介した。

さらに「初心忘るべからずとの言葉がある。留学僧に応

募した初心を忘れることなく精進していただきたい。今日、英語は盛んだが、漢学に相当する英学というものがない。カルチャーショックを受け、

互いに長を採り、短を補うことによって真の国際理解が生まれる。皆さんの貴重な体験を一過性のものにならないで活用していただきたい」と激励した。

記念講演は、留学僧の中から第六回生（第七回生にも継続採用）の沖田玉英さんと、第七回生（第八回生にも継続採用）の李煥秀さんが登壇。

沖田さんはアメリカの禅センターでの修行体験を話し、韓

国から日本の東洋大学に留学中の李さんは「日本の仏教と国民性について」と題して、日本で考えたことの一端を披瀝した。

沖田さんは、日米の修行形態に基本的に大きな違いはないが違うのは、日本の僧が終身僧籍にあるのに対して、アメリカでは一生の間に出家と還俗を往復することは日常的に自由に行けるとし、「僧侶の経済基盤は、日本の場合は檀家制度や托鉢だが、アメリカでは出版物の発行や会員制での基盤づくりが必要で、楽ではない」と話した。

とくに、尼僧の立場から、

女性の地位が日本とアメリカとでは大きく異なっていると指摘。「アメリカでは力があれば、女性でも上位にのぼり、男性を指導する立場にも立つ。

また、日本は一つの形から個性を見いだすが、アメリカは個人尊重の修行であり、どの禅センターも独参を行なっている。仏教を受け入れ、独自に新しく自己流に改革していく力がある」と比較分析した。

### 『労働』に教訓得る

一方、曹溪宗の僧籍をもつ李さんは、日本留学三年間の経験から学んだ三つのことか

ら話を始めた。第一は、永平寺で日本の修行僧と一緒に修行し、曹洞禅の修行方法を学んだことで、道元が日本民族の魂として尊敬されていることを知り、また韓国仏教が釈迦仏教であるのに対して、日本仏教が祖師仏教であることを理解したと述べた。

また、韓国の僧堂では作務よりも坐禅を重視し、一日のうち十時間以上坐るが、日本の僧堂は坐禅の時間より作務の時間が長く、修行方法に違いがあると指摘した。

第二は、日本の「労働者の世界」を理解するために、建設現場で一週間、共に労働を

したことだ。「六十を超えた白髪の年輩者が、休まず汗を流して一生懸命働く姿を見て、人生はいつもあのよう勤勉に生きていかねばならないとの大きな教訓を得た」と李さん。善財童子が仏法を求めて尋ねる五十三人の善知識は、全てが僧侶ではなかったとし、「これは、この世の中の全ての人生の姿が即ち仏法という意味だと思う。白髪の労働者は私にとって、人生の素晴らしい先生だった」と語った。

最後は少数民族の人権と差別問題を考えるために北海道へ渡り、アイヌ民族が生活する村へ入って十日間、一緒に

生活し、その言語と文化、歴史を学んだことで、その体験を通して、李さんは「日本人は他人より自分の利益を重視する性格が強いため、多くの外国人が、日本人は度量が狭いと考えるのではないか」と思ったという。

そして、「いま日本で行なわれている外国人差別の問題は、日本人より性格が荒い外国人と、その荒い性格が全然理解できず、全ての外国人から指紋をとっている日本人の両方に責任がある。同じ国民であるアイヌ人に対する差別と偏見意識を捨てて、少数民族の人権を尊重しなければな

らない。少数民族は少数民族を尊重することが国際社会の倫理を確立する最も大事なことだと思う。日本国民の意識の中にアイヌ人に対する偏見が残っている限り、外国人差別の問題は解決されないと思う」と訴えた。

宮本延雄理事を議長に選出して議事に入り、昨年度の行事報告に続いて、新年度の行事計画が発表された。人事面では、顧問に新しく鶴見大学学長代行の横尾太寿氏が五月十日付で就任。また驚見理事の遷化に伴う理事の補任については、理事会で検討中であると報告された。

新年度は一月に第九回留学僧の採用者を発表、二月にその伝達式を挙行する。

黒田理事長らは四月上旬に中国取材、十月にはベトナム取材をそれぞれ予定。また機関誌『成寿』は一月発行の二十号でスリランカ特集、七月発行の二十一号で中国特集を組む。さらに、阿部慈園参与が、このほどインドの宗教文化入門書ともいうべき『インド四季曆』（東京書籍刊）を上梓したことや、東隆眞理事が出版予定の『禅の世界』（全五巻）に育英会として全面的に協力することなどが話された。